

教師教育における教師の役割

大橋 忠正

(初等教育学科教授)

I はじめに

教育職員養成審議会では、いつの時代にも求められる教員の資質能力として「専門職としての職責にかんがみ、教員についてはA教育者としての使命感、B人間の成長、発達についての理解、C幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、D教科等に関する専門的知識、E広く豊かな教養、F実践的指導力」を挙げている¹⁾。(記号の付加は筆者)

更に、教員の養成・採用・研修の各段階における資質能力形成に係る役割分担として養成段階では「教科指導、生徒指導等に関する「最小限必要な資質能力」を身に付けさせることが示され、現職研修段階では「日々の教育実践を通じて資質能力の育成を図ること」が記されている²⁾。

これを受けて各自治体では現職研修段階の指針を示している。広島県では「求められる教職員像」として、ア高い倫理観と豊かな人間性をもっている (E)。イ子どもに対する教育的愛情 (C) と教育に対する使命感 (A) をもっている。ウ専門性を発揮し (D)、的確に職務を遂行できる (F)。エ社会や子どもの変化に柔軟に対応できる (B)³⁾。東京都教育委員会では「東京都教育委員会が望む教師像」として、ア教育に対する情熱と使命感をもつ教師 (A)、イ豊かな人間性 (BE) と思いやりのある教師 (C)、ウ実践的な指導力のある教師 (DF) を挙げている⁴⁾。京都市教育委員会では、学校教育の基本指針として、「生きる力」を支える確かな学力、豊かな心、健やかな体」の調和を提示している⁵⁾。自治体が求める教職員像にはい

ずれも、教育職員養成審議会のいつの時代にも求められる教員の資質能力を挙げ、学校教育の基本方針には改訂学習指導要領の改善のねらいが拠り所となっている。

教員の生涯にわたる資質能力の段階的な形成において、教員の養成段階に当たる教員養成大学、学部の教師教育においても、この変わらぬ資質能力の育成を視野に入れた指導が求められている。本稿では、教員養成大学、学部の教職科目等の授業 (以下、大学授業と記す) において上記6項目と養成段階の「教科指導、生徒指導等に関する「最小限必要な資質能力」の形成に応える教師教育における教師の役割について論究する。

II 大学授業の教師教育における教師の役割の構想

1 授業における教師と生徒のかかわり

授業における教師の役割を考える時、まず、教師と生徒とのかかわり方に着目する必要がある。授業は、通常、教師、学習者、教材の三者で構成されている。教材に媒介された教師と学習者の相互主体的な活動過程が授業の本質である⁶⁾。平成20年版学習指導要領の骨格を示す中央教育審議会答申 (平成20年1月) の改善項目では、このことふれた「教師が子どもたちと向き合う時間の確保」の項目がある。今、なぜ授業の三要素の中の教師と学習者の関係が取り上げられているのだろうか。答申では「教職員定数の改善や教師が子どもたちと向き合う時間の確保のための諸方策などそのための教育条件の整備」を挙げているが、「授業における教師

と子どもたちが向き合う時間の在り方」こそ検討すべき問題である。その在り方とは、教師がこれを意識段階で留めおくのではなく、教師と学習者が相互にかかわる方法や授業内容、学習者理解にまで踏み込んだ具体策、両者の噛み合い方について検討していく必要がある。

授業における教師と子どもの向き合いには、a教師が子どもと向き合う行為・活動、b教師が子どもと向き合う内容、c教師が全体、個別の子どもと向き合う場面が考えられる。a教師が子どもと向き合う行為・活動には後述のiii授業における教師と生徒のコミュニケーション、iv教師の言語活動の行為・活動が考えられる。b教師が子どもと向き合う内容にはii教授・学習過程の調和で生み出される授業内容が考えられる。教材を媒介とした教師の教授活動・伝達内容(教材内容)と子どもの学習活動・発達内容(反応内容)の総和が授業内容である。特に、その授業内容は教授活動・伝達内容(教材内容)と学習活動・発達内容(反応内容)を統合した時に教材内容を越えた複合的な内容として創出されてくる。c教師が全体、個別の子どもと向き合う場面ではv授業における学習者理解が考えられる。そこには授業集団全体の学習者理解と個別の学習者理解がある。

このように捉えると、授業において教師が子どもと向き合う行為・活動、内容、対象には、教師教育が課題とする内容が包含されていることが分かる。また、授業における教師と生徒のかかわり方の習得は、教員養成段階の「教科指導、生徒指導等に関する『最小限必要な資質能力』」に該当すると思われる。

2 教師教育の教師の役割

教師教育を行う教師の役割にはどのような課題があるだろうか。学校現場で必要とされる教師像をもとに大学授業の教師教育における教師の役割を構想すると次の6点が考えられる。

i 教科指導、生徒指導等のための専門的知識、技能及び態度の伝達

授業とは、時系列による展開であり、教授過程と学習過程から成る。時の経過とともに何かが生じ、何かを生み出す過程が授業である。当

然、そこには講義・演習の伝達内容に関するシラバス、毎時の講義テーマ、板書(学習事項)、教材(資料)の整備等、教師の基本的な行為・活動が必要になる。

ii 授業における教授・学習過程の調和

高等教育では不易・流行を問わず高度な専門的知識、技能の伝達の教授活動が中心となる。しかし、教師教育の授業においては教授・学習過程(teaching-learning process)の原理を考慮した授業構成が求められる。教師教育の対象学生には論と方法が一致した学問知、実践知の修得、体験の場が提供されなくてはならない。

iii 授業における教師と生徒のコミュニケーション

授業の情報伝達、教師と生徒のコミュニケーション活動には教師から生徒への一方向、双方向、三方向のコミュニケーションが考えられる⁷⁾。このうち、教授・学習過程の調和には双方向、三方向のコミュニケーション活動が不可欠である。一方的な情報伝達のコミュニケーション活動では教授・学習過程の相互作用が不成立になる。

iv 授業における教師の言語活動

通常、学校の授業の教師の言語活動には、i講義・説明、ii指示・命令、iii発問、iv発言の取り扱い、v評価の言語がある。フランダースは授業における教師の個々の言語のカテゴリーを教師と学習者の「社会的相互作用の観点」から二分している⁸⁾。教師の権威に根ざした直接的影響の言語(1講義・説明、2指示・命令、3批判・正当化)と子どもの自発的な発言を促す間接的影響の言語(4感情の受容、5称賛、6アイデアの受け入れ、7発問)の区分である。学習者の言語も1指名による応答と2自発的な発言に分け、「授業の雰囲気分析」のカテゴリーとして道徳授業をはじめ各教科の授業分析に用いられている⁹⁾。また、この理論は一部手法を変えて活用されており、近くは岡山県教育センターが開発したフェイスダイアグラムがある。授業における教授・学習過程の相互作用を円滑に図るには、この教師の言語活動の使用状況・使用割合が問題になる。直接的影響の

言語と間接的影響の言語が一方に偏り過ぎない教師の言語活動が授業の教授・学習過程を調和あるものにする。

v 授業における学習者理解

授業における学習者理解には、理解の対象と理解の範囲が問題になる。学習者理解の対象にはおよそ授業集団の全体と個別がある。学習者理解の範囲には授業内容にかかわる学習者理解とそれを含む全人的な学習者理解が考えられる。授業では授業集団全体の学習者理解と全人的な理解を含む個別の学習者理解を目指すのが適当である。授業の中で学習者が学習状況理解に留まらず全人的に受け止められ、生かされてくるからである¹⁰⁾。

vi 授業における教師の姿勢・態度

授業における教師の姿勢・態度には教授活動と学習活動にかかわる姿勢・態度がある。いずれも教師の行為・活動は、学習者に「生きた教材」として受け止められる。教師の態度や行動による感化である¹¹⁾。その場合、教師の価値意識を伴った言語が問題になる。教師の姿勢・言語に価値意識が伴うのは、教師の指導姿勢が情意面で高揚する時が多い。時にそれは学習者の事実認識を不確実にし、学習者の主体的な価値認識形成を閉ざすことになる¹²⁾。教師の熱意・価値観は教師の姿勢・態度から自ずと発露するものであり、それが先行してはならない。

3 教師教育の授業における「受講者ノート」の活用

教師教育の授業における教師の役割を考える一方法として「受講者ノート」の活用がある。

(1) 教授・学習過程における「受講者ノート」活用の原理

教授・学習過程とは教師の教授活動と学習者の学習活動との協同により成り立つ授業の過程である。その教授・学習過程には次の原理が付随し、「受講者ノート」にはその原理を起動させる機能がある。①教授・学習過程成立の「学習者理解」の原理、②教授・学習過程成立の「三方向のコミュニケーション」の原理、③教授・学習過程成立の「自己教育」の原理、④教授・学習過程成立の「自己学習」の原理、⑤教

授・学習過程成立の「学習集団成長」の原理である。すでにこの原理の検証の蓄積は多い¹³⁾。

(2) 教師教育の教師の役割を担う「受講者ノート」の活用

教師教育の課題に即した教師の6つの役割の関連、統合を図るものに「受講者ノート」の活用がある。教師教育の課題に即した教師の6つの役割と大学授業の教授・学習過程における「受講者ノート」活用の原理は次のように関連する。末尾の記号と用語はいつの時代にも求められる教員の資質能力を示す。

i 教科指導、生徒指導等のための専門的知識、技能及び態度の伝達と「受講者ノート」の活用

「受講者ノート」の活用は、専門的知識、技能の伝達に効果がある。以下の「受講者ノート」活用の効果が付加されることにより、更に生徒の自己教育力は増進し、D専門的知識・技能が「生きる力」として生徒に有効に機能する。

ii 授業における教授・学習過程の調和と「受講者ノート」活用による③「自己教育(陶冶と訓育の統合)」の原理、④「自己学習(陶冶)」の原理の作用

「受講者ノート」の活用は、生徒の「自己教育力」、「自己学習力」を促し、教授・学習過程の中の学習過程を活発化し、教授・学習過程の教授活動と学習活動の調和に効果がある。B人間の成長、発達についての理解が容易になる。

iii 授業における教師と生徒のコミュニケーションと②「三方向のコミュニケーション」の原理

「受講者ノート」の活用は、教師と生徒の三方向のコミュニケーションの中で生徒の反応の喚起と教師のKR情報(Knowledge of result・評価の情報)の提示を活発化する。生徒の成長・発達に対する関心・敬意の表れのコミュニケーション活動であり、C教育的愛情がその基底にある。

iv 授業における教師の言語活動と「受講者ノート」の活用

「受講者ノート」の活用は、授業における教師の言語活動の診断・評価の場ともなる。

適度な直接的影響の言語は教材内容の伝達に効果があり、適度な間接的影響の言語使用は生徒の自発的発言・活動に効果がある。F実践的指導力の基本のスキルになる。

v 授業における学習者理解と「受講者ノート」活用による①「学習者理解」の原理

「受講者ノート」の活用は、授業における教師の学習者の全体理解と個別理解の促進を可能にする。個別の学習者理解においては教材内容の理解に留まらず生徒の認知、技能、情意から成る全人的な学力（認知傾向、感受傾向、操作傾向）の理解、及び既習の知識、既有的経験・体験内容の理解、更には、今を生きる生徒の姿勢・態度の把握の一助になる。それら学習者の実態把握と学習者理解を図る上で、教師はE広く豊かな教育的教養を發揮することになる。

vi 授業における教師の姿勢・態度と「受講者ノート」の活用

「受講者ノート」の活用は、授業における教師の姿勢・態度の行為・活動そのものである。それは時に教師自身が生徒に教師の在り方を考える教材として映り、A教育者としての使命感の一端を表すことになる。

以上、「受講者ノート」の活用は教師教育における教師の6つの役割に有機的に関連する。

Ⅲ 大学授業における教師教育の実践

「受講者ノート」の活用による大学授業の実践の取り組みを記すと次の通りである。「受講者ノート」とは、個別적으로는、授業者の講義内容に対する受講者の主体的な認識、思考、意見等を記す用紙と全体的には、その内容から成る印刷・配布物をいう。毎回、講義終了10分～15分前に用紙（A4の1/2サイズ1枚）に記述させて翌週に評価・返却（個別的な活用）を行うものとその内容の主なものを十数名選んでは印刷・配布（A4サイズ2枚）する受講者の反応記録（全体的な活用）とがあり、その総称を言う。

1 「受講者ノート」個別的な活用の実践

大学授業における「受講者ノート」の活用には、個別的な活用と全体的な活用がある。筆者

による個別的な活用の主な授業科目と「受講者ノート」活用についての学生の反応・考察を記すと次の通りである。

○「教職論」（平成21年度）

平成21年度学生の課題レポートの記述（2009.12.20）と第14回「期待される学校教師論」（2010.1.8）の記述の中で「受講者ノート」活用についての学生の考察の一部を取り出し、教師教育における教師の6つの役割に該当する箇所を示して記すと次のようになる。教師の6つの役割の表記は、以後、i教科指導、生徒指導等のための専門的知識、技能及び態度の伝達は「専門的知識」、ii教授・学習過程のあり方は「教授・学習過程」、iii授業における教師と生徒のコミュニケーションは「三方向のコミュニケーション」、iv授業における教師の言語活動は「教師の言語活動」、v授業における学習者理解は「学習者理解」、vi授業における教師の姿勢・態度は「教師の姿勢・態度」と記すことにする。

i 専門的知識：先生の子どもに対する理解力、これほど子どもの気持ちを明確に記し、それに基づいて対策などの実行に移した本は読んだことがない。（略）この本では納得できる調査法を用いて納得できる対策を持って実行に移している大橋先生や他の教師陣が描かれている。子どもの求める「授業」「学校」を写し取った本であったと思う。（大現 小松 真琴）

ii 教授・学習過程：14回の「教職論」で私の教師観が変化した。子どもに教材内容を教えることが大切だと思っていた。しかし、一方向の授業でなく子どもを生かした授業を行うことだ。（大現 河合 理紗）・授業内容＝教材内容＋子どもの反応。教材内容はわずかな呼び水でも呼び水なしには水は出ない。教材内容を与える教師になりたい。（大現 西村 佐希子）

iii 三方向のコミュニケーション：「教職論」の授業では先生は論を述べた後に必ず事例を挙げその論を検証している。毎回、授業後の「受講者ノート」では、先生もまた私たちがどのくらい理解しているか確かめている。私はこのアウトプットの作業を重視したい。自分では分

かっていると思っても人に伝えるとなると簡単
にいかない。(大現 中井 美歩)

v 学習者理解：私が教職課程の授業を選んだ
理由は、教師の対応によって深く傷つけられた
経験があるからだ。自分が教師になった際には
生徒に楽しい学校生活を送ってもらいその中で
一生の礎となる能力を身に付けてほしいと願い
を持って授業に臨んでいた。(レポートの題名
「一生の礎となる初等教育とそれを支える教
師」)大橋先生のように生徒を熱く思い教育に
尽力しておられる先生に初めて出会った。私が
いじめに悩んでいた時、大橋先生のような先生
が近くにいてくれたのなら…と何度も思った。

(大現 片山 恵理)

vi 教師の姿勢・態度：14回の授業を受けて大
切だと思ったことは、教師は人間として輝くこ
とだと思う。私は先生を見ていてとても輝いて
いると感じたからだ。人間として大切なことを
忘れずにいたい。素敵なお先生=素敵なお人だと思
う。

(大現 廣瀬 由麻)

○ 「教職論」(平成22年度～課題レポートの記
述 (2011. 1. 12))

平成22年度学生の課題レポートの記述 (2011.
1. 12) の中で「受講者ノート」活用について
の考察の一部を取り出し、教師教育における教
師の6つの役割に該当する箇所を示して記すと
次の通りである。

i 専門的知識：「教職論」の授業のテキスト
を読み進めていくうちに「子どもが生きる学
校」は「教師が生きる学校」でもあるのだと感
じた。子どもが「生きる」方法や術を教師は教
え伝えていく。教師には努力、忍耐、愛情、ス
キルの向上、安定した指導力など多くのことが
必要とされる。教員同士の連帯、協調も大切だ。
そう考えれば教師も生きているのだ。(略)学
校教育の在り方をこんなにも広く学べた今、私
は夢へと大きく一歩近づいた。

(大音 岸本 有里子)

ii 教授・学習過程：「教職論」の授業も残り
少なくなりました。この授業は他の授業と
全然違う。毎回の授業の終わりに「受講者ノ
ート」を書いて、その日学んだことを自分でま

め直して理解すること、規律ある授業の雰囲気、
先生の教育に対する溢れんばかりの熱意、数え
あげればきりが無い。「無限の可能性を秘めた
学校」(大児 藤岡 知美)

iii 三方向のコミュニケーション：テキストの
中の「教師にとって、子どもの学習に対して常
に関心と敬意を払っていくことが真に子どもを
生かす道」という言葉、生徒は先生に関心を持
たれ敬意を示されると益々やる気が沸く。生徒
の授業態度は教師が創り出すものだということ
が分かった言葉である。(大現 須崎 由希)

iv 教師の言語活動：テキストの中の「子ども
に手柄を立てさせる」という言葉、学校とい
うのは教師が中心ではなく子どもが中心である。
子どもを成功させることによって成長させるこ
とができるということが分かった一言である。

(大現 須崎 由希)

v 学習者理解：私は教師になることは全く考
えていないが、将来、自分が子どもを持った時
に役に立てるのではないかと思い「教職論」を
受講した。(レポート「親が知るべき学校～モ
ンスターペアレントになる前に」)

(短英 小瀬 佳苗)

vi 教師の姿勢・態度：先生の「教職論」の授
業を受けることで、生徒の立場から教師の本当
の在り方を見つめることができた。資料を配
った上で行う流れの掴み易い授業、生徒への疑問
の投げかけ、授業後には「受講者ノート」、毎
時間、よい経験をさせていただいていると思う。
(レポート「子どもの心と生きる力を育てる教
育」)(大児 釘宮 有梨果)

○ 「人権教育論」(平成22年度)

平成22年度の「人権教育論」のまとめの記述
(2011. 1. 20) の中で「受講者ノート」活用
についての考察の一部を取り出し、教師教育に
おける教師の6つの役割に該当する箇所を示して
記すと次の通りである。

i 専門的知識：「人権は勝ち取られたもの」
と講義内容で出てきたように、今ある人権が守
られている生活に感謝しなければならないし、
私も子どもを大切に、人権教育をしていき
たいと思った。人を尊ぶことは素晴らしいこと

ある。(短初 岡野 友紀)

v 学習者理解：一人一人を見ることが一人一人の人権を尊重していることの体现であり、それによって相互理解がなされ「人権教育」が行われるのである。まさに、この授業こそが「人権教育の鑑」であるのだと考えることができた。

(短初 石川 美智子)

・私は「受講者ノート」の記述を通して先生に見ていただくことで、大勢の一人ではなく個人として見てくれることで自分自身の「尊厳」「個性」を受容、尊重してもらっていると感じた。また、全員に朱書き指導をしてくださることで「公正」・「公平」を感じる事ができた。「受講者ノート」の記述活動には人権教育の目的の全てが含まれていると分かった。このように人権を理解し勉強できてうれしい。

(短初 高橋 奈緒子)

vi 教師の姿勢・態度：私はこの「人権教育論」の授業で眠くなることがない。先生が私たちをよく見てくれている、見つめてくれていると認識できるからだ。(短初 片岡 佳奈)

○ 集中講義「中等社会科指導法v公民科教育」論 高知大学教育学部 2009. 2. 7～2. 10

平成20年度集中講義「中等社会科指導法v公民科教育」のまとめの記述(2009. 2. 10)の中で「受講者ノート」活用についての考察の一部を取り出し、教師教育における教師の6つの役割に該当する箇所を示して記すと次のようになる。

i 専門的知識：社会科は民主主義を支え人類だけでなくこの地球上に存在するあらゆる生命体が共存できる世界を目指す役割を持った教科であると実感した。私も公民としての役割を果たし未来を創る子ども達を育成する教師になりその使命を担いたい。(尾坂 竜昭)

ii 教授・学習過程：集中講義では子どもと向き合うことの重要性が分かった。大橋先生の影響も大きい。毎回、数十人の講義ノート、コメントを付けて返却。私が教師になった時、このようなことができるよう積極的に生徒と向き合っていきたいと思う。(大西 豊人)

iii 三方向のコミュニケーション：「分かりやすく教えてほしい」ということは本当の子どもの気持ちであると思う。生徒と噛み合う授業を創るということの中に心、姿勢、態度についての部分がある。授業者の授業ではなく学習者の授業をしたい。(寺田 翔子)

iv 教師の言語活動：私はこの講義を通して子ども達に花を持たせる授業づくりが一番大切ではないかと思った。私の高校時代の授業がつまらなかったということである。知識を詰め込むだけの授業ではなく子どもが主体的に考え教師がアシストする授業だ。(千頭 慶祐)

v 学習者理解：私は言語活動の前提として教師と生徒が向き合う関係づくりについて考えさせられた。私は担任の先生とほとんど話をしたことがない。成績に関する話と行事や書類などの事務的なやりとりしか話した記憶がない。そのような関係では生徒が自ら発言したり、懸命に論述したりというような言語活動は望めない。これから教師が真っ先にすべきことは、一方的な板書とノートの書き写しの授業から、コミュニケーションを中心に会話のキャッチボールで成立させる活気のある授業づくりだと考える。この集中講義は私にとって大学生活の中で最も充実した4日間だったと思う。(小松 詩織)

vi 教師の姿勢・態度：教師は生徒に自分の考えを押し付ける評論家のような教師になってはいけない。それに情熱を注ぐのではなく生徒との向き合いに情熱を注ぐべきだと思う。

(江口 明彦)

○ まとめと考察

①「受講者ノート」個別的な活用の実践では教師教育における教師の6つの役割が果たされている。i 教科指導、生徒指導等のための専門的知識、技能の伝達に効果があり、ii 授業における教授・学習過程の調和については教授・学習過程における個別の生徒の発達・成長過程の支援の場の設定となり「自己教育力」、「自己学習力」促進に効果が見られた。iii 授業における教師と生徒のコミュニケーションとv 授業における学習者理解も「受講者ノート」活用の機能から想定した効果が見られた。「受講者ノート」

活用によって授業改善が間接的に図られるのがiv授業における教師の言語活動の診断・整備である。適切な直接的影響の言語と間接的影響の言語活動を行うことで生徒の「受講者ノート」の記述は活発になる。vi授業における教師の姿勢・態度については、「受講者ノート」の活用が教師の在り方を考える教材として学生に受け止められていた。

②「受講者ノート」個別的な活用は、各科目の専門的知識、技能の伝達内容にも有効に機能している。「教職論」では教育課程の指導の在り方、学校教師の教育理念、指導観、児童・生徒観など教師の資質・能力の形成を意図して授業を計画した。その中で学生は自らの学習者体験と重ね合わせ、学校、授業、教師の在り方についてテキストをもとに積極的に思考し、その自己教育、自己学習の場として「受講者ノート」を活用していた。更には、教育方法、教師の在り方を考える教材にもしていたことが分かる。「人権教育論」では、人間の権利は尊厳、自由、平等、公正など複合的な価値観を内包し、その人権尊重の理念を理解、体得させることを意図として教材を整備し授業を計画した。140人の学生は当初、「受講者ノート」を講義内容理解の診断・評価の場として捉えていたが、次第に主権にかかわる複合的な価値をそこに見出し、「受講者ノート」活用を価値づける動きが見られた。

③「受講者ノート」個別的な活用は、短期間の実践でも可能である。「中等社会科指導法・公民科教育論」は、他大学での4日間の集中講義である。公民科教育の歴史と平成元年版学習指導要領改訂による「公民科」設置の経緯と授業実践事例、更には今後の公民科教育の在り方を内容として授業を計画した。「受講者ノート」は短期間の活用ながら授業における非常勤講師（筆者）と学生のかかわり方の基盤整備に役立ち、学生自ら中・高校の関連授業の想起と講義内容との関連思考を促し、主体的な認識形成の場となっていた。

2 「受講者ノート」全体的な活用の実践

大学授業における「受講者ノート」の全体的

な活用、筆者は本学では「社会科教育方法論」（前期）と「社会科教育内容論」（後期）において実施した。（平成20年度～23年度）

ここでは「受講者ノート」の活用と自己教育性との関係についての検討を行う。自己教育性の四側面～自己教育の構えと力は次の通りである。Ⅰ成長・発展への志向（1目標の感覚と意識 2達成・向上の意欲）Ⅱ自己の対象化と統制（3自己の認識と評価の力 4自己統制の力）Ⅲ学習の技能と基盤（5学び方の知識と技能 6基礎的な知識・理解・技能）Ⅳ自信・プライド・安定性の四側面、七視点である¹⁰。

(1) 自己教育性の促進と受講集団のモラルの高揚

平成22年度の「社会科教育内容論」のまとめの記述（2011. 1. 20）の中で「受講者ノート」活用について学生の考察の一部を取り出し、自己教育性の四側面に該当する箇所を示して記すと次の通りである。

- ・自分のノートと他の人のノートを比較すると自分の文章の稚拙さが分かった。（Ⅱ自己の対象化と統制）まとめ方も様々で、ある授業が難しく分からなかった時など他者の「受講者ノート」を読むことで理解できた。まとめたノートを読むことの効用である。（Ⅲ学習の技能と基盤）（大史3 井上 恵）
- ・「受講者ノート」を皆で書くことでこの授業の受講集団に一体感、お互いに高め合い切磋琢磨することで多人数講義を受ける良さを実感できた。（Ⅳ自信・プライド）社会科授業の意義だけでなく集団授業の在り方を知った。（Ⅰ成長・発展）（大児3 鈴木理沙子）
- ・一番身をもって考えたことは、教師と生徒の協同により授業を創り上げているということだ。「受講者ノート」により一度自分の学びを記述（Ⅲ学習の技能と基盤）、その後、もう一度次の授業で他の「受講者ノート」のまとめを読むことで自分では気付かなかった学びを得ることができた。（Ⅱ自己の対象化）授業を受けるだけでなく創る。私も創る一員だと思え、一層授業を頑張ろうと思えた。（Ⅰ成長・発展）「受講者ノート」の返却で先

生が身近に感じられ、記述が楽しくなった。(Ⅳ自信・プライド) (大史2 藤井 翔子)

・「受講者ノート」は私にとって自分と向き合う時間、友達のと向き合う時間、コメントを通して先生と向き合う時間であった。(Ⅱ自己の対象化) クラス皆で授業を創るという印象であり、私もしっかりその一員なのだと感じさせられた。(Ⅳ自信・プライド) こういう授業を創れる人になりたいと将来への意欲がわいた。(Ⅰ成長・発展)

(大史2 佐藤春菜)

・自らの「受講者ノート」と12回分の「受講者ノート」を通読して感じたことは、最初に比べると皆や自分の文が花に水を与えたかのように成長し良い文を多く書いている人がいたということである。(Ⅲ学習の技能) 「受講者ノート」を書くために授業を真剣に聞き、自ら問いを持ったり、思い出したりと向上心が高くなった気がする。(Ⅰ成長・発展) 先生にも見てもらい、自分も見て、他人も見るという「受講者ノートトライアングル」と名付けたい。(Ⅱ自己の対象化)

(大国2 久保 友紀子)

(2) 「受講者ノート」活用とレポート発展学習 (自己教育力)

「社会科教育方法論」の個人レポート(2011. 7. 7)の記述と「社会科教育内容論」の共同研究レポート(2010. 12. 17)の記述の一部を取り出し、自己教育性の四側面に該当する箇所を示して記すと次の通りである。

○ 「社会科教育方法論」における個人研究レポート

・「京都市の水道のはたらきと人々の暮らし」

教育学科2 井上 友希子

はじめに

(略) 地域素材の教材化が教師の力量である。加えて、今回の演習課題には、いかに教え、いかに授業を創るかという視点が含まれる。社会科授業を創る楽しさに挑戦したい。(Ⅰ成長・発展への志向) (略) 調査をしているうちに当事者には申し訳ないが研究に追い風が吹いた。6月20日午前4時すぎ、水道管が破裂する事故

が発生した。新聞を読んだ時、これはよい教材になる、よい教材にしてやろうと思った。(Ⅱ自己の対象化と統制)

まとめと考察

(略) 資料6では「水道管破裂、1500戸断水」として新聞記事を読み、実生活により近い形で課題が追求できるようにした。資料7では「野崎さんの投書」として資料6と関連づけながら水道管破裂事故を体験した人の声を読むことにしている。(Ⅲ学習の技能と基盤)

最後に、研究を終え、私自身は蛇口をひねれば当たり前のように出る水道の水にありがたみを感じるようになった。(略) 琵琶湖疎水記念館のパンフレットの中の「京都に命の水をもたらします」という言葉が忘れられない。「命の水」を児童に実感を伴った理解をさせることができたなら、私の期する授業は成功だ。(Ⅳ自信・プライド・安定性)

・「奈良の鹿と人間の共生」への取り組み

教育学科2 井上 咲

はじめに

(略) 奈良公園の鹿は人間に飼いならされた動物ではなく、文化財として奈良の地で生きている。児童がこの全国でもまれな奈良県の特徴について学び、奈良県民としての誇りと奈良県への愛着を感じることができるよう研究を進める。(Ⅰ成長・発展への志向)

まとめと考察

(略) 鹿苑の中には怪我をした鹿、農作物を食べた鹿などがいた。どこか寂しげな雰囲気が漂っていて、改めて、本当の「共生」とは何かについて考えた。(Ⅲ学習の技能と基盤) 汗をかきながら歩き回ったフィールドワークはとても充実し、有意義な時間だった。カメラとペンを首からぶら下げ、ボードを手に調査した時間は、一つ一つの発見がうれしく、わくわくするものであった。私自身の問題解決能力を磨くこともできた。(Ⅱ自己の対象化と統制) (略) 完成したレポートを手にとると達成感に満ち溢れる。以前にも増して、生まれ育った奈良が好きになった。(Ⅳ自信・プライド・安定性)

○ 「社会科教育内容論」における共同研究レポート

・「鴨川と人々の暮らし」(1班6人)

(1) テーマ設定のねらい

大史3 森下 真理

私たちは「鴨川と人々の暮らし」というテーマで研究を進めた。(略)川の両サイドは舗装され利用者でにぎわっていた。広いスペース、ベンチ、渡り石など公園のような空間が広がり、ごみも少ない。なぜか、鴨川は地域の人々にとってどのような場所であるのか。地域の一員としてどのように理解すべきかと問いが生まれ、地域の自然を理解することで公民的資質を養うことにつながると感じ研究動機とした。(Ⅰ成長・発展への志向)

(2) 研究方法 (略)

(3) 研究計画

大福4 秦野 名奈

(略)班員が疑問に感じたことをもとに「なぜ、鴨川は単なる川としてではなく、人々の憩いの場として京都にあるのか」という問いを設定した。鴨川のために自分達にできることを考えさせることを軸に副読本作成を行うことを決めた。11月26日、内容の分担を決める。はじめに・おわりに(井上)鴨川の様子・四季(高橋)鴨川の環境活動・私達にできること(伊丹)鴨川マップ・インタビュー(森下)鴨川の今と昔(秦野)鴨川の歴史・汚かった川(神藤)(Ⅲ学習の技能と基盤)(略)

(4) まとめ

大国3 伊丹 咲穂

初グループ研究だったので最初は戸惑った。いつもなら個人的な動機から始めるが今回は班の仲間の意見や同意なしにはできない。(Ⅱ自己の対象化と統制)(略)グループ研究だと仲間から貴重な意見を参考に副読本ができ広い範囲を調べることができ、6人で作ったという達成感にも浸ることができた。(Ⅲ学習の技能と基盤)(略)友達どころか知り合いもないグループ研究だったのでどうなるだろうと思っていたが、終わってみるととても楽しかった。(Ⅳ自信・プライド・安定性)

・「今熊野商店街に活気を取り戻そう」(4班7人)

(1) ねらいと研究動機

大音2 清原 祐香

京都女子大学のある東山には沢山の歴史があるが忘れてはならないものがある。今熊野商店街である。調べてみると深い歴史のある場所だと分かった。(略)私はこんな歴史のある商店街がどうして目立たない存在になってしまったのか疑問に思った。その原因はどこにあるのか。どうすればもう一度今熊野商店街を活気づけることができるのか、調べていくことにした。

(Ⅰ成長・発展への志向)

(2) 研究方法

大音2 菊本 梓

(略)今熊野商店街の衰退の原因はどこにあるのか、もう一度活気づけるためにはどうすればよいのか調べて考えることにした。まずは今熊野商店街の何について調べたら筋の通った研究になるのかを考え、意見を出し合った。(Ⅱ自己の対象化と統制)沢山の意見が交わされたが、最終的には「今熊野商店街の歴史」「今熊野商店街の現状」「京都市東山区の人口」「京女生の今熊野商店街に対する意識」「今熊野商店街の現在の取り組み」の5つについて追求していくことになった。(Ⅲ学習の技能と基盤)

(4) まとめと考察

大音2 河越 奈津美

(略)今回の調べ学習や班での話し合いで今熊野商店街への興味・関心はもちろん、グループ内での仲も深まることができた。話し合いの中で史学専攻の方たちは資料の探し方のプロであると感じ、大音は発想が豊かであると感じ、私たちのコンビネーションはとてもよかったと思った。(Ⅱ自己の対象化と統制)学部を超えた新しい仲間、考えの発見ができとても楽しく学ぶことができた。(Ⅳ自信・プライド・安定性)この調べ学習こそが自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え取り組むという学びの場だと改めて感じた。(Ⅰ成長・発展への志向)

○ まとめと考察

「受講者ノート」全体的な活用では次のことが明らかになった。

①「受講者ノート」全体的な活用によって学習者相互のかかわりが促進され、受講者全員で

授業を創ることが可能になった。授業は集団による一斉授業が一般的であるが、そこで期待できる集団学習の成果が確認された。200人を超す一斉授業の受講集団における受講者相互の連携も可能である。

②教授・学習過程成立の「受講者ノート」活用の5つの原理が実証された。特に、「受講者ノート」全体的な活用の場合には受講者の自己教育性（陶冶と訓育の統合）の促進と自己学習力（陶冶）の増進、更に受講集団のモラルの高揚に有効である。個人レポート、共同研究レポート、いずれのレポートにも自己教育力、自己学習力の結実と受講集団の成長が認められた。

IV 結 語

授業における教授・学習活動は、教師の教授活動と学習者の学習活動との協同活動から成る。教育職員養成審議会が示したいつの時代にも求められる教員の資質能力の6項目をこの授業構成の二要素で類別すると次のようになる。①教授力に関する資質能力としては、D教科等に関する専門的知識、F実践的指導力。②育成力、即ち幼児・児童・生徒の成長、学習活動支援に関する資質能力としては、B人間の成長、発達についての理解、C幼児・児童・生徒に対する教育的愛情。③両者に共通する資質能力としては、A教育者としての使命感、E広く豊かな教養の三種にまとめられる。教育職員養成審議会が示したこの不変の教員の資質能力は、学校の教育課程で行われる「授業」に臨む教員の職務に対して発想されたものであると言える。

本稿では、大学授業における教師の役割の一方法として「受講者ノート」の活用を取り上げてきた。その結果、教育職員養成審議会が示した不変の教員の資質能力の6項目は、「受講者ノート」活用の中で有効に機能し、授業構成の二要素の充足に一定の効果があることが判明した。

平成20年版学習指導要領の改善項目「教師が子どもたちと向き合う時間の確保」は、主に「授業時間における在り方」を指したものである。その際、「教師が子どもと向き合う時間」

のねらいは、教授活動のためだけでなく、子どもの学習支援活動のためだけでもない。両者の時間の調和が重要であり、その点で「教師が子どもと向き合う時間の確保」が目指す指標は、不変の教員の資質能力6項目の有機的統合であると断じてよい。そのための教員の資質能力向上に向けた取り組みは、大学の教師教育の段階から始められるべきであると考えらる。

註

- 1) 教育職員養成審議会「教員の資質能力の向上方策等について」(昭和62年答申)『文部時報』ぎょうせい 昭和63年38頁
- 2) 前掲1) 参考図「教員の資質能力の形成に係る役割分担のイメージ」
- 3) 「人材育成の基本方針」及び「求められる教職員像」広島県教育委員会 平成17年3月
- 4) 「東京都教育委員会が望む教師像」『東京都採用選考案内』東京都教育委員会平成22年4月1日
- 5) 「生きる力」を支える「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和『学校教育の重点』京都市教育委員会 平成22年度
- 6) 砂原喜代次『教育学大事典』第一法規 昭和54年
- 7) 坂元昂『授業改造の技法』明治図書 1980年28頁
- 8) 加藤幸次『授業のパターン分析』明治図書 1977年 25頁
- 9) 拙書『子どもが生きる学校』ぎょうせい 2001年3月 58頁～64頁
この拙稿は共同研究「自己教育力が育つ学校環境の充実」の中の「道徳授業における人的環境のはたらき」と題する論文である。詳しくは、全国教育研究所連盟編『子どもが創る一自己教育力への道』上巻 ぎょうせい 平成元年5月134頁～141頁にある。
- 10) 拙書『社会科授業実践学』ぎょうせい 2002年2月 203頁～206頁 219頁
「授業における学習者理解」の事例の詳細は、拙稿「中等社会科指導法の教授方法に関する研究—「受講者ノート」の活用を中心として」『高知大学教育学部研究報告』第1部 第55号 平成10年 1頁～19頁にある。
- 11) 「教師の態度や行動による感化」『小学校指導書 道徳編』文部省 平成元年 58頁
同書には「教師の授業に臨む姿勢や熱意は、授業中の様々な態度や行動となって表れる。それは児童の態度や行動にも反映し学級の雰囲気をつくる」とある。
- 12) 前掲10)「教師の指導姿勢の変化と価値意識を伴う発問」184頁

- 13) 拙稿「『社会科教育法』教育の教授方法に関する研究(4)」京都女子大学 平成22年 98頁～100頁
- 14) 梶田毅一「自己教育とは何か－基本的な四側面七視点について」北尾倫彦編『自己教育力を考える』図書文化 1987年 19頁～27頁